

感謝

最愛なる尊きバガヴァン、あなたの聖なる蓮華の御足に謹んでお祈りを捧げます。敬愛する先達と兄弟姉妹の皆様に、サイラムとご挨拶を申し上げます。

インドのカレンダーは祝祭で占められています。今日はグループルニマーの前日ですが、私はすべてのサイの帰依者にとって、このグループルニマーは特別な意味があるように思います。さまざまな祝祭をさまざまな宗教的、霊的、あるいは社会的な催しとしてお祝いするのに対し、グループルニマーは帰依者たちがジャガットグル（世界のグル）の蓮華の御足に、再び自らを捧げるために集う唯一の祝祭です。私たちが皆、帰依心を深め、バッテリーを充電して、それぞれの務めに戻るためここに集う時、心に留めておかなければならないことはいったい何でしょうか？

バガヴァンのたくさんの御教えの中で、たびたび私の心の琴線に触れるものが一つあります。バガヴァンは「感謝」を非常に大切にされています。バガヴァンのみならず、すべてのアヴァター（神の化身）たちはくりかえし感謝の重要性を示してこられました。

ラーマ神と小さなリスの話は有名です。あのリスはラーマ神へのささやかな奉仕のおかげで永遠の命を与えられました。シュリ クリシュナとドラウパディーの出来事も心に残る話です。クリシュナ神の指に棘が刺さった時、王妃たちは皆、あわてふためいて布切れを探しました。しかし、ドラウパディーはとっさに自分のサリーを引き裂いて、クリシュナ神の指に包帯を巻いたのです。神がドラウパディーに示した感謝は伝説となりました。

スワミの人生もそうですが、すべてのアヴァターたちは御教えを説くだけでなく、それを自ら実践することによって教えて下さいます。「私の人生が私のメッセージです」というあの有名な御言葉は、単なる誇張ではありません。まだ世界に自分が誰であるかを宣言するずっと前から、村の幼い子供であったときから、スワミはこの「私の人生が私のメッセージです」という御言葉を絶えず実践してこられたのです。

およそ三十年か四十年ほど前、バガヴァンがホスリーヒルズを訪問されたときのことを思い出します。ホスリーヒルズからの帰り道、バガヴァンは突然立ち止まり、「ちょっとある者に別れの挨拶をしに行かなければなりません」とお

っしゃいました。皆、バガヴァンは一体どこへ行かれるのだろう、と不思議に思いました。すると、バガヴァンは一頭の水牛のもとに行き、その胴体をポンポンと叩いて、水牛にお礼を言われたのです。その水牛の奉仕とは、毎日丘の上までの道のりを歩いて、バガヴァンとその一行のために水を運ぶことでした。バガヴァンはこの水牛の行った小さな奉仕でさえお忘れになりませんでした。これほど素晴らしい感謝のお手本が他にあるでしょうか？ 私たちが人生で何を所有しようとも、それは他の誰からでもなく、神ご自身からの恵みを受け取っているのです。バガヴァンが昨日お話しになったように、私たちは何も持たずこの世にやって来ました。そして何も持たずにこの世を去っていきます。しかし、この地上に留まっている間は、多くのものを楽しみます。多くのものを楽しむのは神の恩寵の結果に他なりません。つまり、所有する一切を神に感謝しなければならないのです。では一体、どのようにしてこの感謝を表すことができるでしょうか？

私たちは神に何かを与えることなどできるでしょうか？ ある程度ならできるかもしれないと感じますが、それは不可能です。なぜなら、私たちが所有するすべては神が与えて下さったのですから。物質的な富のすべて、日光や水などこの世界を構成するすべては、神が人間に与えて下さったものです。おそらく神に捧げることのできる唯一のものとは私たちの愛でしょう。しかも、神ご自身が私たちに注意を促しておられるように、この愛という捧げ物でさえ、天地創造の初めに神が人間に与えてくださったものなのです。

神に何かを与えることに関連して、私は皇帝バリの話を思い出します。皇帝バリは、ナーラーヤナ神が幼いバラモン〔僧侶階級〕の少年の姿をとって現れたとき、誇らし気にこう言いました。

「そなたの欲しい物を言いなさい。私がそれを与えよう」

バリの師であったシュクラチャールヤは、この幼いバラモンの少年が誰であるかに注意を促しましたが、バリは一向に気に留めませんでした。バリはクシャトリア〔王族、武士階級〕の言葉を引き合いに出して、「真に高貴な人間は決して約束を破ったりしないものだ」と言い、その一方で「たとえこの幼いバラモンの少年がナーラーヤナ神その人であり、私に悲運や破滅をもたらしたとしても、結局のところ、彼は神なのである」と言って、その理を説きました。

「ヤグニャ〔供儀〕で何かを捧げれば、バラモンの手は下に、私の手は上にくる。生まれてこの方、私はずっと受け取る側にあった。受け取る人の手は、常に与える人の手よりも低くなる。これはもしかしたら、私の手が神より上にくる唯一のチャンスかもしれない」

兄弟姉妹の皆さん、バリは何かを神に捧げることにより、自分の手が神の手よりも上になって幸福だったかもしれません。しかし、私たちは神に捧げることなどできないのです。学生として、私は自分が入学してから学んだシュリ・サティヤ・サイ大学のことしか思い出すことができません。多くの人がシュリ・サティヤ・サイ・ハイヤー・メディカル・サイエンス（サイ病院）の与えた恩恵を証言することでしょう。また、この地域のすべての人々は、シュリ・サティヤ・サイ「恵みの水」プロジェクトを称えることでしょう。私たちは皆、サイの御手から受け取っており、私たちの方から与えることはできません。ではどのようにして感謝を表せばよいのでしょうか？ 救いとなる聖典がここにあります。

ナ カルマナー ナ プラチャヤー ダネーナ

ティヤーゲー ナイケー アムリタットワーマーナシュフ

「行為でも、子孫でも、富でもなく、ただ犠牲によってのみ、

私たちは不滅の命を得ることができる」

この世界から得たあらゆるもの、私たちが楽しんできたあらゆる恩恵に対して、ほんの少しでも社会に還元しようではありませんか。他の人から受けた善行は、たとえどんなに小さなものであっても感謝して、忘れないようにしましょう。私の前にサンジェイ サハニ氏がお話しになったように、自分が他人に施した善行は忘れましょう。そして、他人から傷つけられたことも心に留めないようにしましょう。その代わりに、どんな小さなことであっても、私たちにできる善いことを実践しようではありませんか。

ここで、私はハヌマーンとヴィビーシャナの話を思い出します。ヴィビーシャナはラーマの帰依者であり、絶えずラーマの御名を唱えていました。ハヌマーンのことを知ったヴィビーシャナは次のように嘆きました。

「ハヌマーン、あなたはなんと幸運なのだろう。あなたはラーマの側にいて、ラーマの同伴者としての恩恵を受け、ラーマの仕事にも携わっている。私もそのような幸運に恵まれていたらなあ。私はもう何年もラーマの御名を唱えているのに、神のダルシャンも与えられず、神のお側にいることもできない。神に対して、何のお役にも立てないでいるのだ」

これを聞いたハヌマーンは、ヴィビーシャナにこう尋ねました。

「ヴィビーシャナ、母なるシーターはどのくらいここに住んでおられるでしょう？ あなたもまたこの宮殿の中に住んでおられる。あなたは特別な地位にあります。〔訳注：ヴィビーシャナはシーターを幽閉した悪魔の王ラーヴァナの弟〕

あなたは何か母なるシーターのお役に立ったことがありますか？ あなたはラーマの御名を唱えておられる。しかし、私はラーマの御名を唱えるだけではなく、ラーマへの奉仕に従事するよう全力を尽くしています」

同様に、声を張り上げてラーマの御名やサイの御名を唱えるだけではなく、たとえ小さなことしかできなくても、サイへの奉仕に従事しましょう。そうすれば私たちは本当にあがなわれることでしょう。

ジェイ サイ ラム

1996年7月29日
シュリ ルチアール デサイ